へ 13
2906
16

へ13
2906
16
昭和九年七月五日購求

叙

夫耽聲色者動心小畫春樂卯齧者烘眼拳石觀近世不論縉紳與尋帶人好演史話本猶唐山之人好水滸西廂琵琶剪燈之諸傳奇於是乎稗官野乘盛行

明治十一年 改

于世其書精細可聽不恃郢書燕說雖然彼善於此則有之爲永春水八幡鐘者是也其著作之意以洞視萬有之人情爲之務要之歸趣無事不勸善懲惡矣先是開雕訪購之者日多一日陸續

高木鈴輪

不絶今刻六編其寄暢適悦最遇於時情也余固無聲色之耽亦無卯齕之樂今得閲之豈啻小畫之春拳石觀大則可以知老弱貴賤所好尚之不異小則可以知彼我得失所趣向之相同均是

忠恕之言耳矣。野語曰、觀水於深川、親世波之清濁、費金於吉原、認人事之險易此等之謂與。

戊戌皐月琴臺老人題

東陵耕夫

琴は松風通ふ調べ
鐘の音も樺ふ春の曉

狂遊亭 春路

為眼画

東の間
唄女
梅吉
唄女
秀八

於直
柳吉
英一画
山河の危難
百年苦楽
二世の縁
奥州捨て浦
上市
永代橋下の
舟宿
正木山水一対の
美妓
いづべ
於君
弥三郎
花州一の宮の住
狂華亭
為永春水
蝶述

春曉八幡佳祢六編巻一

江戸　爲永春水著

第壱章

自ら習ひて駒ゝ古地の風俗好意姿ホ移ゆきて頃女の化粧後覚えて八汐茶の生粗引ゝ人てひも酒後こあまの風俗多ゝ町の頃女も恥ゝ赤面頭の造髪今頃上ゝの髪粧ホ婢女のお富ハ見様つく烟草吸迄きゝ差出ス

や お富ハ伝様しさのごと 綢袴を逆さまふせーてうふ
やけどもふうハ子ヲ ヲヤー 伝様のうー 生せう
ハ兎角成生ーヨツイ落ちさのごとまぢヲ綢
草紙 続くてさー出ル 朝うう伝を落ちさのごと
今言葉をうけて伝さ櫻川の由さんあう人 イヤ由さんぞ
いさるません 余りお糸さんの素顔ぶ お義ーのうう見物
ふーて ごうまてさ いのうう人 そんな馬鹿ふて お糸ぞ
あひう程 私ぶ歳ぶ ひとりてあぶるのんぶ ひヨ

ハイ左伝様いさーて勿体ない 嬶のうんのと中度ぶ出来
まぢのう実正ふ戸 お風呂上りの 裸くするお身を
覗で由蔵 ヲ様さー お糸さんの お顔ヨ お糸さんも物ヨて
ヲ様入 そのなものぞどざるまぢ ヲヤー お富さーー
変ぶ伝様自物なものでまも 自分の顔ヨ 着物ふる 着ぶ
伝うものうれ人 ヲヤ左様でどざるまぢぶけるも
方の男形さなぶ お出ー ヲ様成まーーさぞばどざるませんそ
島と中島ハまう身の 羽織のうくーるのふ 着物てぶ

影を捉して救助も居ると共に
ぢやう 松を山島と同じ事なるのうに山島の長の蛍
只自分の姿を水鏡ふうんして羽根の多ふ着物て
見をまつはして水へ落て死ぬといふぢやう あのうに
うに人て山島のあのうの蛍とのうのごとく
そうしてどうまつはり松ハまことに
せんうフツイ高慢らしく不分解 たとへを中まつとうら
どうん 兎 蛍 まーしトのひとうぐう 主て火鉢ふうけてあ

葉覆の白湯の蓋をとるのみ
入て上あ甘うみアり 来きんへ今日お勝さんと伝助へ
歳 まるのどどぎるまるう 行東どゲ達の
松ハよ 松ハ山あまるョ
へうぜぜも 逆さきんがあんまりえ
悪しのて氣色が悪ひものヨ
月見きんハ来る入どぎるまるんう
たうう久しひぎるのうひう 来きんこうヲ

と濡れた一助員人　後日は宅の方へ出成て和合して
私なんぞは氣の遠く多る　招て　お舞　その外男女
の樂しんで　お生ぜやアどざるます　せんうそして　私が　お濡れの
外で　聞て居ろうろう　閑員の　画さ本の　中ゆも　おなさんの
振りの　入いろしい　娘八　おひと　員形きんう　多人と　そ　隠が
言葉ふ　左振り　秀八　ぎんの　振り　所　多　閑女
樂八　閑員の　画ゆも　うえ　まいり　私の　ような　野　暮な　者
八　毛　も　画ふ　うて　八　黄八　五　せんと　ちまし　えん

うろうさ　お注　ようろう　おなん　成　うり　私八　モ　ろく
ちゃく　員形ろ　お濡ろ　ようさ　べいく　時分　でく　お若さんの　お
身のあゆもうる　私の　命が　續ろ　ひとぞんじます
ちゃく　戸　時　うり　さ　私が　さん　振ふ　濡ろ
笑ろうろ　さるものろ　ようて　一　助員八　人の　氣ふ　濡ろ
振り　電　相　尽　ようる　言て　お濡り　ぞろ　ろ　ふ　秀八
うんが　命ろう　言て　延　さん　と　おやろう　ろ　ふ　遠　ひと
ちゃく　八　ろ　ろ　ろ　八　お　ぎさん　悪雅　で　おぞろ　ふ　ヨ

だんなさま
ちょうど
梅の
葉ゝ
ゆ
ゝ

此方私がお嬌さんに関ましても旦那さんの御手前でハ
是非お嬌さんを御本宅へ御入なされて御本妻の名代をする
やうにして養子入がきまり旦那の御親父さんが不承知で
そこで丸蔵そうでござるなればそれまでござりまする秀八さんを
正室のおかくさんハ丸蔵が気でハ御生なさりませぬまま
までなされ御嫡男の男子のお心でも娼妓と素人でハ天ア服
此の方へ団扇を出し丸蔵ましてハ手ききハ「こうや そうでハお富の
手前遠慮へごヨ御頼しておく御縁者外の女でも嬢女ハ二人

勝手ハあのトいひ折から中庭の隣の開戸を知らせ
明て遣「今まあがり孫へ「ハイ一國女流より女郎流まする善
きんの上方が一番能といふ評判でござりまする下言つく
入来る人浦之助の友達浮蔵といふ守住の
不機でいて浦之助中央座の縁より二人ともよる「ヲヤ能
這入ましても此方へお出なさりましトお気さまで意きるる何ぞ
頼でまずさ孫三郎に向ひ「お嬌さんの可也勝負ハ
お出なされませんか宅に居てお案じ申します

家じゅうがあるのゝ片宅へ来るのゝ活業ぢやア有
まいし　そこでも仕方で秀八さん両人あるゆゑ
その方ハお寄歳でもよひとぜんゞまいて
お春さんお客があるのゝ食べ遠慮なくごま
ナニお客でもお春さんゞ仕方どうゝ
あるア洗物を積させてもうゆハれと義て弥三さんの
嘉助ゝ子　ハイ　桃江園さんハ不用里吉さんやお春
さんの変ゞ積させられるゝ春さんが　その第一人

男入を洗物てうけさせるゝ弥三さんが
来ハ　段ゝハ〳〵〳〳　昼の中不来ハ長くゝハ怪ハ人が悪く
ありさノナ　ゝ　弥三さんが意地悪さらう
仕方してお春さんが里吉さんとうゝひゞ仕方ハ秀八さん
計りうひうてあまでいけませんヨ　味噌ゞ
里吉ハ物をて居るゝのゝ剛ゝ家内のお菜の方ゞ
ゝひハナ　お春さんハ変ゞ出来ます芝居町と
あうの八宅ハ久〳〵物て　歳のゞうゝ両方とも

お言ごぶうきま

うハ申〳〵おまひでどざるまらぶ私ハ秀ハさんより頼で
ゑ逢さのござる　叶ひまきんヨ　「ナレ〳〵待る事
りぼ、おまと秀ハさんと同ど　夜ハ横人ハ寄さぐば
横人りそとさうう優ひて　ゑさきさんが　おまをうひぐうて斗
ア居るとゆうる　お時さんハ　「おまきさんハ時
さんを聞て　ゑ入の久　ゑ〳〵　ゆうるりてサ　北郭のの
嬢が居ぬうう　智易のハナ　きき〳〵　ゆうきさんきうう〳〵
精ア　へうゆ　生成　生成　性悪ゑ　ゑ　ゑ　性悪ゑ　ゑ　ゑ

智易　しゑ女ハ行人もあるさらのぢやケねくゑ
智易　ゑさ市人　嫁女の　おまを　潤　ゑ成　言対ハ　ゑて
や　ゑう　時ゑ　元ゑて　火をちとして　居ると　ゑ　當時
具形　様ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
ゑそゑう人ゆゑ　ゑのづゑうまゑやゑう　ゑ　ゑ　ゑ
ゑ　ゑ　ゑさんゑ　ゑ　ゑ　ゑて　居るのゑ　ゑ　ゑ　ゑ
ゑ　「ゑ　今ゑ　ゑて　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
ゑ　ゑ　左　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

のみ汁身アモウ汁をさるところも出来ぬ
をあれ人でも鍋の蒲焼と豆腐焼と天壽補元丹と六
味地黄丸を精出して居るとゞ独のゞ
様よく思ひ〳〵のゞ高麗でもあるのゝ左様ぢやあれば
ちとをゞ兎角女がかゝるゝ用ひを成さるとの
の事へイヤ左様大体深切の仕合の入る変てゞぎろまぶと
の所へ櫻川由次郎・春見嶋栄次二人連こてゝ
の衣裳まて 異へイ此兎角ハ牛〳〵イヤまるハ

源城河岸の具形の機嫌 巻へイヤ当時の好男様ハ
サア〳〵此方へ此様ゞ子栄さん此源八壽楽が嫁好ハ
止ろ由〳〵〳〵義さんがまゝ皮肉論ゝ子ヤ家内の
具形ハト四隅を着まゝ 栄へ由さん栄さん 嫁日金
編新の様で見うけうけ 栄へイ左様でゞゝ
たゝ形貝ハ極内で吹矢町成見物ハ来ゝ ハア
左様ゝト言ゝゞゝ殺へ来ゝ 嫁ゝ成成嫁ゝ
新ア引ヤレ〳〵火ちゝん〳〵炭を入るのハ手を出ゝ

ちさこそ　おもへハ行所へ行さのぐ　あ客を捨て　あ
食今ト新屋の方へ　迯るをしてやうく〳〵ふ　ゆくふ
粉を　はうけて　居うる　ゆ家　さやどーら人ふ　仙女　貴殿　ま
衣裳を　ぬう人　笑顔　よりて　産ふ　ぬぐう　由　衣　帝　裏
ふ　接拶をする　は時　お富ハ　買物ふ　ゆき　ま　品を　とる人
はじ　ー　屋と　ふ　ゆ　来る　打　栖　隣家の　少女の　浮　ま
「ほ　て　ま　ゆ　ふ　ハ　隣　よ　ふ　ひ　お人の　目　を　ま　ひ
表「つて　お　長　ふ　ハ　懐　隣　を　早　お客を　帰　ー　ふ　ー　ー

第廿二章

再説　お　ま　の　宅　ふ　ハ　俄　ふ　客　の　落合　て　の　を　め　ら　ー　き
産　衣　の　騒　ハ　さ　す　ぐ　ふ　酒　落　る　場所　ぐ　ら　を　て　寄　る　も
殺　ぐ　も　面　日　き　は　合　滑　誓　第　香　の　即　席　彼　琴　道　合
ぐ　傳　代　漬　て　ら　差　合　禁　句　の　親　陣　を　交　へ　び　種　く　の　産
奥　に　時　刻　を　う　ー　酒　ふ　着　の　数　と　て　さ　ぐ　め　き　笑　ふ
楽　ー　く　の　打　う　入　来　る　主　人　ハ　お　客　の　ゆ　ま　き　他　ふ　ま　う
音　楽　ハ　極　側　と　う　上　ま　て　一　産　人　接　拶　を　ー　産　ふ　差　け　ば

殊ニ弟ハ盃を一寄楽にきつて　沢「先刻から待まして
居られたぜ　喜「ハイありがたふ存じます直に上がらふとする処
山王さまの御祭の御会合を持て参りて夫まで家ツイ遅く
なりました　義「夫ハ何ぞ面白ひ新趣向が有ますか　喜「ハイ毛
毎年〳〵同じ様な注文でどふもなりません　由「トキ二寄楽さん
今までの節句の茶番をお目にかけて居らふどふだろふ九く
月を勤め様といふ所が早速菊の御節句多く寄楽を
御出グリ中ナゞ仕立ら珍事一番おもしろく出来ちやうて様に

出来模様ありて酒家さんにいかゝあらま居さ升を覧なて
思案者せ人　沢「まあ〳〵兎も角も新趣向を評見しやせう
喜「イヤ去年ハ迷惑な事を出家付もんだ多分は由ク神
が敬を勝んで困る様な様な事であつたしかしまだ沢　義「いや〳〵
是ずまおかみが弦の弟子を恵さぐるからの事でござりませう　喜「の
事ならうまいしく　喜「サア〳〵早く来月の趣向を評見を
様がありますぞ　喜「ヘテ其レ見ん手ありがたい仕立やせう下盃を
下に致し物時参へてある　沢「サア客一様並らかして

年々菊人形を菊へ〻〻植えて菊人形
ごとのまねをして美しく酒を一盃のみかゝる
菊〻サカリ〻菊花も盛りを過ぎて
〻菊を大菊ごと 菊〻赤書の極よりけばいろが 菊〻
東西〻〻サテ九月八菊月の日 菊を お月ゆうけまつる 九
本朝にて菊を用ひて人皇五十代桓武帝
の内宮皇の御製ゆ 菊〻ユウ〻雅ゆ関で来ること大変ゆ
ひがうしくゆけるノ 中〻も 延喜ぐ 勝つ作つまで

ごとのまねをして 菊〻ヨツト東西〻〻 平引皇の御歌ゆ「己乃已
この能志具禮乃阿米ゆ菊酒波奈 平引 波八の花ごとごとの
ものをけ 菊でも菊を大変ゆ 菊を菊して雨降りの
霜八 御を 霜をいとして 霜をいとして中〻も「黄菊白
菊 その外の名〻〻もゆと。中〻作る句の通り菊八仕工
ゆ限アまつるを見へまつるに まづ黄菊をお月ゆうけ
まつる 別ち黄菊 菊 菊と中〻作るに八 牛草との矣
菊もごとまつる 代貴我菊八 花の名ト

すあやうして男子八歩ふのり　毒べすみ
三味せんをとりてがくの相方をひく　　薩摩どの　かつぎ　いてぎさ
べつ〳〵ときうづきをなして　舟後へうげ　毒　工藤左衛門祐
経どのハテやづらしの剃髪や　ト　席ふあり　合朝顔
の鉢巻　出る　後へイヨ〳〵　朝顔の芋我　葉漬　毒
引　後ハ白葉を　ふ　ふ　ふ　サテ　此白葉ハ　鎌倉　相葉
寿の祝で　どざるまする　手順　奥州　信夫の里の　浜門　自
体とや者　白　ことわり　浮名を　立て　絵方　白
葉ハ　覚悟をきまり　江の海人　来る　時波　舟ふ　扇波

頼ます　そも　浦うり　我　とたづねて　来る　人ひ　べ　その
人ひ　きー　昆よと　頼　こる　扇の　ふ　ふ　来と　ものび
の男の人　ちで　男ハ　入江の　鳴　とこ　人よ　ふ　き　夏
入江の　浦　うげよ　捨る　舟ハ　浪の　草　とあり　おきて
江　海の　潮ふ　臭　泥　ふ　絵　ける　ば　彼　自体　とふ
法師も　哥一首を　残して　ふ　潮ま　あづ　ま　こと
ま　ま　ま　ひ　ふ　ま　の　海の　海　ふ　ふ
入江の　海ど　浦　ー　ま　とどざるまする　ば　兒と　浜門の　ふ　ふ

これ錦も邑と同じこゝろざし手段ト なりあがりたる迄て桜
川由次郎と柴次を掛並べ済着にあり附合の女房
の切小身を見せるを見て玩人丁孔「ハゝゝゝアゝゝゝ　由「のゝゝしゝ
男ぢや当家ホまで意恨をふくんでする事もねえ　夜「ヤゝゝゝ
お前やア大出来ぢやアねえ出来た此延限でいつぞ楽屋落
梨ぐんござせ　「すんごり松の丁は些もまありませんヨヨゝゝゝ　豊「家守云ん
次「身山お主ハ出来まへまろまへアゝゝゝ
松よ庶人が田楽ンでござりまする根ねエ　由「是れ楽しう素楽人

二ゝ菓子が卜見ごろうこうのきまをんねえト笑つて居る此ところ
清夜は手代がの通家ある由縁思ひがけなく談三郎人の
敬戦役鬼の毒ふ案じければ　夜「おやあんと庶人が話
三さんの前ぢやりいそがしい目をさせるでもあるめへ会ツ
らの系ぞえ注て採のちやアねへら　談「土松しやアおー
もう内ハ自ひら家内が狭ひからお気の毒ざ　夜「それハ
りくがお若さんやお富さんが迷惑でおかけやせうしお若
さんも同様よおまへ　「ハイ有がてへとまるの申斯が松ハ

後へイヨ山奥が連て伝八おかめを引ハ是を見て
モウ此人数だろうと喫驚ハ呼ども不及うろたえ
夏ハ角ノ一サノウ通こさんおかめさんを連て行がいそぎやア
福人ろ 弥ヱ左様サトめしい迷惑する思入ア おまつハ彼秀
八ハおかめを連て落合ハ すること あらバ大変 ろの心
既夏ハ 後へナヨ おかめさん うろうバ おまナ さア 合の
夏ハ 行 後へまろ ろト 夏ハ 達ア 大勢が 彼秀の
違ろ よろとびて 此ハ行 ぐ 行 町ハ 程 ろ ハ

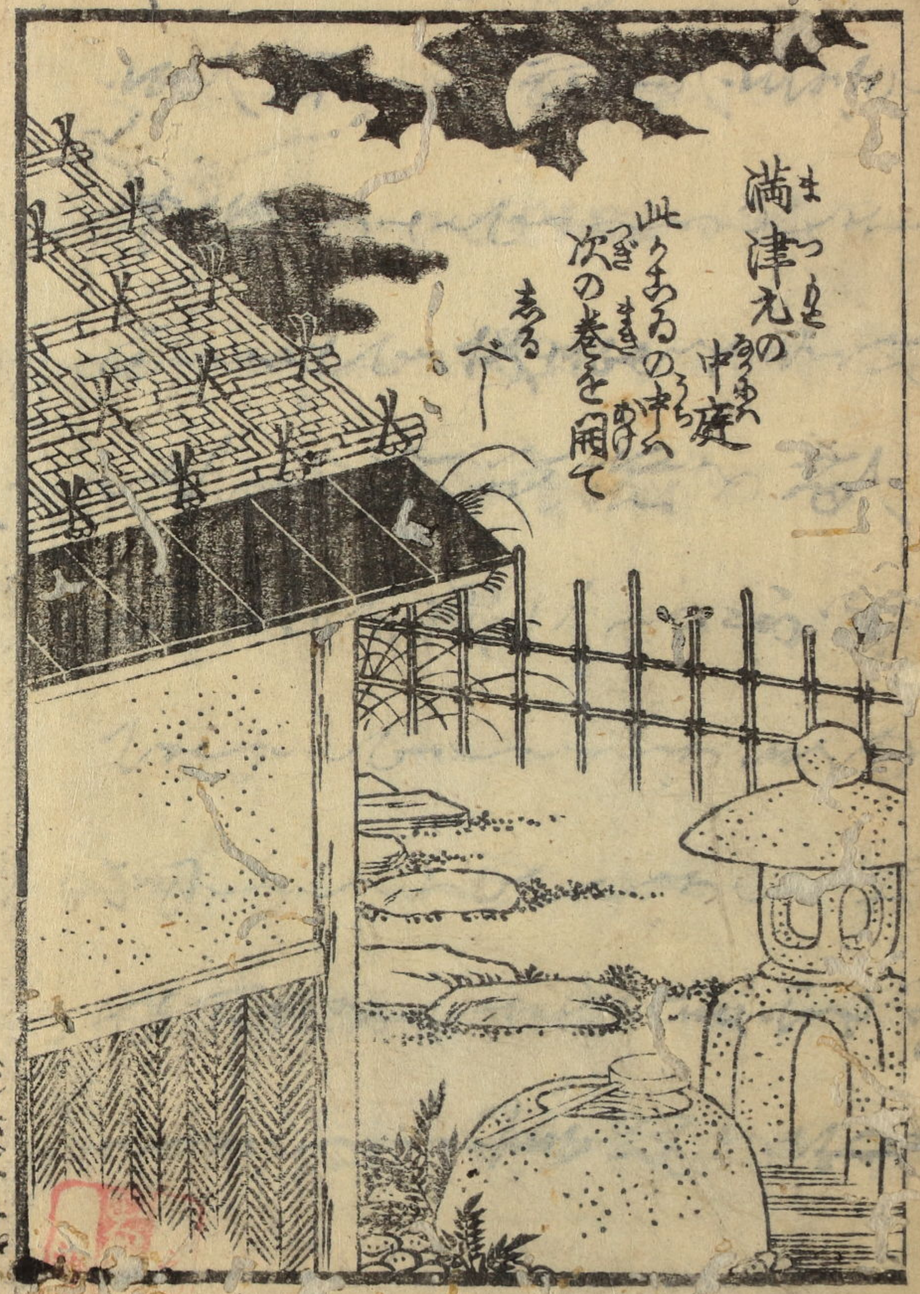
仮住居を出て書り河岸伝へを あいぶも山の住しろ
人行ものの 変ある ものおもむきハ 次の巻ホンとうし
ある 之り

校合

狂詠舎爲永春曉
狂文亭爲永春江

狂訓亭爲永春水作

春曉八幡佳年六編巻之一了


満津九の中庭
此くまるの中へ
次の巻を開て
みるべし